伊勢新聞　2024年9月25日付

「実感湧かない」初々しく

男子史上最年少Vの佐々木音憧さん

スケボー・ストリート世界選手権

ローマの夜空に両手を突き上げた。堀米雄斗（三井住友DSアセットマネジメント）、白井空良（ムラサキスポーツ）に続く日本男子3人目の世界一を、17歳の若さで達成。「こんな大きな大会で勝ったのは初めて。実感が湧いていない」と初々しく喜んだ。

選手3人で共同生活をしながら競技に打ち込む。より良い練習環境を求め、約2年前に出身の四日市市から愛知県蒲郡市に移住。4歳でスケートボードを始めるきっかけとなった兄の来夢さん（20）、友人と夜9時近くまで滑りを磨く日々だ。「1人で滑るよりも楽しい。調子が悪いときはアドバイスをくれる」と切磋琢磨（せつさくま）している。

転機は昨秋のパリ五輪予選第4戦（スイス）だった。スター選手のナイジャ・ヒューストン（米国）から「（技の）難度を落としても決勝に上がれる」と助言を受けて実践すると、初めて準決勝を突破して2位。来夢さんは「気合の入り方が変わった。俺でもいけるとなったみたい」と弟が深めた自信を感じ取る。

通信制の第一学院高3年生は、ヒューストンと米国で一緒に練習する機会にも恵まれ「トップ選手がそこまでするのなら」と筋力トレーニングや柔軟運動を取り入れた。パリの切符は逃したが「次は絶対に行きたい」と4年後のロサンゼルス五輪を見据えている。

「音」の字が入っている名前は、ダンスの経験がある父が名付けた。共同生活では料理担当。多彩な技を見せる競技と違って「得意はない」と台所では悪戦苦闘する。

スケートボード・ストリートの世界選手権で男子史上最年少優勝を果たした佐々木音憧さん